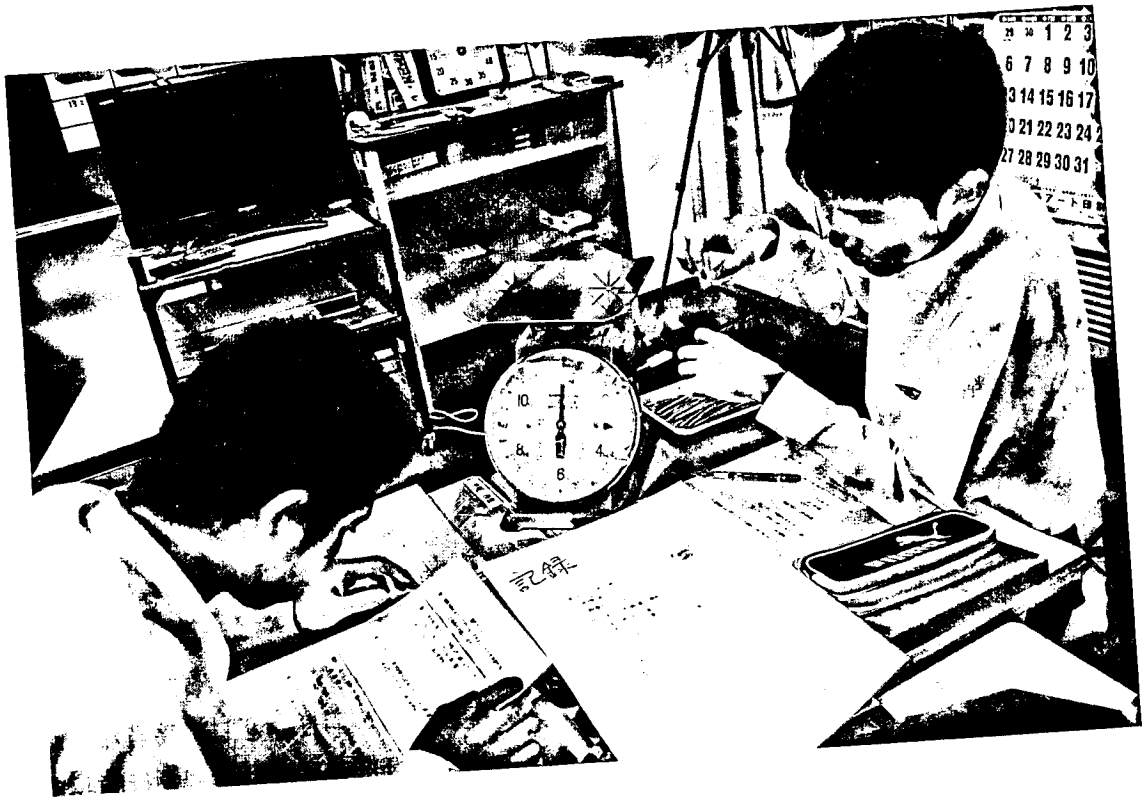
高等部の実践



目　次

1　作業学習　「窓清掃をしよう」 ---------- 70
高等部Ｄグループ　佐藤誠　川添直人

2　美術科「版画で表そう（働く私）」 ---------- 73
高等部のびのびＡグループ　四元明美

3　数学科「比例」 ---------- 76
高等部Ｄグループ　今村広海

4　国語科「丁寧な言葉を使って伝えよう」 ---------- 79
高等部Ｄグループ　東屋敷卓

5　総合的な学習の時間「現在の自分」 ---------- 82
高等部２年生　鶴田智美　東屋敷卓　飯母有沙子

6　作業学習「ふようまつりに向けて製品を作ろう」 ---------- 85
高等部木工班　宮内文久　川添直人　渡邉千鶴　飯母有沙子

7　音楽科「いろいろな楽器を演奏しよう～リズム創作～」 ---------- 88
高等部のびのびグループ　渡邉千鶴　宮内文久　飯母有沙子

8　作業学習「リサイクルメモ帳を作ろう」 ---------- 91
高等部Ａグループ　小久保博幸　東屋敷卓　鶴田智美

高等部　作業学習

単元名「窓清掃をしよう」

授業者：佐藤　誠　川添　直人
対　象：Dグループ　男子4人　女子2人
実践期間：平成24年4月～7月

Ⅰ　授業の立案

1　単元の全体目標

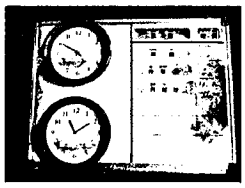
(1) 正しい方法・手順で責任をもって窓清掃を進めることができる。
(2) 教師や友達と協力して，時間を意識して計画的に窓清掃をやり遂げることができる。

2　指導計画（習得型と活用型の学習活動）

次	主な学習活動・内容	習得型・活用型	時数
一	1　道具の使い方，作業手順を知る。 (1) 道具の名称を理解する。 (2) 道具の使い方を理解する。 (3) 窓清掃の手順を理解する。	【習得型】 教師の見本を見て，道具の使い方，作業手順を知る。 【活用型】 教師の見本を見て，作業手順を確認しながら作業を行う。	6
二	2　窓清掃をする。 (1) 教室や廊下の窓を清掃する。 (2) 特別教室や廊下の窓を清掃する。	【活用型】 実際に，決められた手順に沿って窓清掃を行う。	4

Ⅱ　授業実施後の改善の経過（授業記録の一部を抜粋）

1　授業担当者で行った改善

目標，教えたいこと	生徒の様子	具体的改善策	改善後の様子
時間を意識して作業に取り組むことができる。	Aさん，Bさんが，しばしば作業開始時刻に遅れても，平然としている様子が見られた。 （5月9日）	自分たちで作業工程の計画を行い，作業場に作業工程を書いたホワイトボードと時計を掲示するようにした。  写真4-1　改善後のホワイトボード	Aさんが，時計を見て，あと何枚窓が拭けるか言葉に出して考えたり，作業を急いだりする姿が見られた。 Bさんが作業中はよく時刻を確認し，終了5分前には友達に知らせる姿が見られた。 （6月5日）

2　授業研究会（参観者）を通して行った改善

（甫立教諭：４／26実施　作業学習の授業研究会「名札を作ろう」における場の設定の意見を参考にした。）

目標，教えたいこと	生徒の様子	具体的改善策	改善後の様子
自発的に道具を準備したり，片付けをしたりすることができる。	Ｂさんが清掃の後に，掃除道具を置きっぱなしにする姿が見られた。（４月25日）	中学部作業学習の授業研究会で道具管理の工夫が検討されたことを受け，本授業でも清掃用具を個別に分け，個々で管理できるようにした。（５月25日）	Ｂさんだけでなく，他の生徒も，作業前後に，自分の道具が全部そろっているか確認するなど，自分の道具を大事に扱う姿が見られるようになった。（５月２日）

3　授業研究会（授業者）を通して行った改善

目標，教えたいこと	生徒の様子	具体的改善策	改善後の様子
手順カードを使って一人で窓清掃をすることができる。	Ｃさんが，１枚の手順カードでは，手順の読み取りが難しく，作業が止まってしまう姿が見られた。（５月２日）	Ｃさんは，知能検査の結果等から継時処理が得意なのではといういう意見をもらった。そこで１枚のカードから，１工程１枚のめくり式手順カードに変更した。（５月９日）	窓清掃の途中で作業が止まってしまう姿が見られなくなるとともに，手順カードを使う時間も短くなってきた。作業完了の報告も元気よくできるようになった。（５月９日）

Ⅲ　授業と生徒の変容

1　授業の変容

清掃班は，本年度，初めて設けた作業班であり，４月当初，生徒が作業内容に見通しをもてず，教師から言われたことのみを行う姿が多く見られた。４月下旬，授業改善により個人で使う道具を個別のバスケットに収納し，各自で管理できるようにしたことで，自分の道具は各自で準備ができるようになった。しかし，共同で使うものを準備するときは，誰かが準備するだろうという気持ちからか，生徒同士で相談しあったり，協力しあったりする場面はほとんど見られなかった。そこで，作業開始前のミーティングでは，道具準備等の役割を自分たちで設定し確認することで，自分の役割に責任をもつことができるようにした。また，終末の作業日誌による振り返りで，「なぜそうなのか。」，「次回はどうするのか。」と階層式に自分の考えを整理できるようにし，自分たちの課題を意識できるようにした。そうすることで５月下旬には，自分たちで相談・協力して道具を準備し，足りない道具があると気が付いた生徒が，友達に言葉掛けをして準備する姿も見られ，各自が自分の行動を計画的に考えたり，友達への思いやりの気持ちが見られたりするようになってきた。

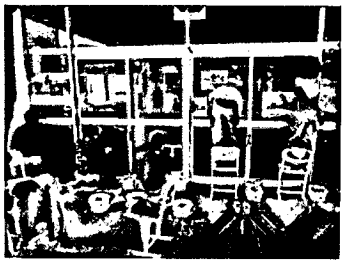


写真4-2　作業に取り組む様子

2　生徒の変容

Ａさんは，４月は手順カードやメモ帳を見ながら作業することに一生懸命で，作業の出来映えまで意識することが難しかった。そこで，出来映えを意識できるようにするため，「終わりました。」の報告を受けて，教師と一緒に出来映えを確認するようにした。そうすることで，作業手順も正確に覚え，出来映えも良くなった。教師から「ガラス面に水滴が残らなくなったね。」等の称賛を受けることで，手順だけでなく，水滴が床に落ちないようにスクイジーの下に雑巾を添えるなど，作業方法を自分で工夫する姿も見られるようになった（教材・教具とのかかわり）。また，４月はスクイジーで水を上手に切ることができず，作業終了後は自信なさそうに小さな声で「終わりました。」の報告をする姿が見られた。そこで，教師が見本を示した後，自分で「どうしたらよいか。」考える時間を設定するようにした。そうすることで，Ａさんは教師の見本を手掛かりに何回もスクイジーを引き直す姿が見られるようになり，作業を繰り返すことで上手に水を切ることができるようになった。また，「終わりました。」だけでなく「どうですか？」と真剣な顔つきで相談する姿も見られるようになってきた（自分とのかかわり）。

写真4-3　Ａさんの改善後の様子

Ⅳ　活用場面の様子

Ａさんの知能検査の結果には，「プランニングを意識するようになってきている。」，「効率や速さを求める状況での作業に，難しさを感じている。」などが挙げられていた。そこで，身に付けさせたい力を「自分のしたいことやすべきことを計画的に進める力」と設定し，作業学習では，大切なことをメモに書き留めて確認することで，効率よく時間を意識した活動をする取組を行った。そして，段階的活動場面として，産業現場等における実習で，実習先（高齢者福祉施設）の御協力をもらい，「○○を△時までにやってください。」等の効率や速さを意識する場面を設定，これらの力を身に付ける取組を行った。室内清掃の作業では，最初は支援員さんが10分程度で終わる作業に30分程度掛かり，落ち込む姿が見られた。しかし，１週間経つと，「メモ帳で工程の確認をしなくても作業に取り組むことができるようになりました。」と自信をもって報告できるとともに，室内清掃も20分程度でできるようになった。このように，「自分のしたいことやすべきことを計画的に進める力」を高めるために，実習先と連携した取組を行うことで，その力を様々な場面で発揮するＡさんの姿が見られるようになった。

写真4-4　実習先での様子

Ⅴ　成果と課題，本実践に取り組んだ感想等

清掃班は，本校で初めてのサービス系の作業班であり，これまでの窯業・木工などの製造系の作業班との違いを意識した授業づくりを行った。しかし，当初は技能習得の面に重点を置き過ぎ，振り返ってみると，製造系の作業班と変わらないものとなってしまう時期もあった。そのようなとき，授業研究会の中で，責任感，効率性，計画力などのキーワードが参加者から出てきたことで，作業に必要な内面の部分の大切さを改めて意識できるようになった。今後も，これらのキーワードを大切に，授業改善に取り組み，生徒が主体的に取り組むことができる作業学習を追究していきたい。

高等部　美術科

題材名「版画で表そう（働く私）」

授業者：四　元　明　美
対　象：のびのびAグループ　男子6人　女子1人
実践期間：平成24年9月～11月

Ⅰ　授業の立案

1　題材の全体目標

(1)「働く私」というテーマに沿って主題を決め，参考写真を基に下絵を描いたり，色遣いを工夫して刷ったりすることができる。

(2) カーボン紙や彫刻刀，ばれんなどの，版画に使用する材料の性質や用具の扱い方を理解し，適切に使用することができる。

2　指導計画（習得型と活用型の学習活動）

次	主な学習活動・内容	習得型・活用型	時数
一	1　版画について知る。 (1) 参考作品を見る。 (2) 一版多色木版画の技法や使用する材料・用具について知る。	【習得型】 制作の手順や技法，材料・用具の特性や扱い方等の知識を身に付けることができるようにする。	1
二	2　主題を決める。 3　下絵用の参考写真を選んで印刷する。 4　版を作る。 (1) 下絵を描く。 (2) 下絵を版木に転写する。 5　版を彫る。 6　版を刷る。	【習得型】 木版画の基礎的技能を身に付けることができるようにする。 【習得型・活用型】 彫刻刀の安全な扱い方を習得し，彫り方を工夫して表現に生かすことができるようにする。	8
三	7　鑑賞をする。 (1) 作品カードに題名，工夫した点などを書く。 (2) 自分や友達の作品について感想を発表する。	【活用型】 工夫した点や作品から感じたことを言語化し，要点を踏まえて伝えることができるようにする。	1

Ⅱ　授業実施後の改善の経過（授業記録の一部を抜粋）

1　授業担当者で行った改善

目標，教えたいこと	生徒の様子	具体的改善策	改善後の様子
説明をよく聞いて，彫刻刀の安全な扱い方を理解することができる。	AさんとBさんは，CTに注目せず，よそ見や手遊びをして説明を聞いていない。（9月25日）	前方に注目しやすいように，コの字型の座席から，前方を向いた座席配置に変更した。（9月25日）	AさんとBさんが，注目する時間が増えた。しかし，説明の後半は手遊びが見られ，安全な扱い方を完全に理解するに至らなかった。（9月28日）

2　授業研究会（参観者）を通して行った改善

（鶴田教諭：７／13実施　総合的な学習の時間授業研究会における視聴覚機器の使用を参考にした。）

目標，教えたいこと	生徒の様子	具体的改善策	改善後の様子
説明をよく聞いて，彫刻刀の安全な扱い方を理解することができる。	Ａさん，Ｂさんは，黒板に要点を示した写真カードを掲示するとしばらくは注目しているが，後半は注意がそれて，内容を十分に理解できていなかった。（９月28日）	授業研究会で，視聴覚機器を活用した説明に対して生徒の関心が高い様子が見られたことを受け，本授業でも要点を示した映像をモニターに映し，間近で視覚的に理解できるようにした。（７月13日）	Ａさん，Ｂさんは，説明の映像を最後まで集中して見ることができ，説明のとおりに，彫刻刀の安全な扱い方の要点を理解して，制作する姿が見られた。（10月４日）

3　授業研究会（授業者）を通して行った改善

目標，教えたいこと	生徒の様子	具体的改善策	改善後の様子
めあてを意識して制作活動に取り組み，終末で振り返りを行って，次時につなげることができる。	終末での振り返りの評価が「頑張りました。」，「上手にできました。」という感想が多く，次時につながる振り返りになっていなかった。（10月４日）	観点に沿って振り返ることができるとよいという意見を受け，観点を示し，制作途中の作品を見たり，本時の活動を想起したりして評価表に◎○△で評価を記入するようにした。（10月24日）	観点に沿って，制作途中の作品を見たり，本時の活動を想起したりして評価を記入できた。（11月９日）

Ⅲ　授業と生徒の変容

1　授業の変容

本グループの生徒は，初めて木版画を経験することから，木版画の制作の手順や，彫刻刀の安全な適切な扱い方について，繰り返し指導を行うことで基礎となる知識と技能の習得を図った。題材開始の９月には，要点を示した写真カード等の視覚的な教材も使用したが，生徒の注意を向けたり，集中力を持続させたりすることが難しく，内容の理解についても十分ではなかった。そこで，今までの美術科の授業研究会の記録を振り返ったり，授業研究会で意見をもらったりする中で，①ＣＴや友達とスムーズに関わることができるよう，活動内容に応じてに座席配置を変えること（人とのかかわり），②説明を集中して聞いて理解できるよう，生徒の興味・関心が高い視聴覚機器を有効に活用すること（教材・教具とのかかわり），③一人で準備・制作・片付けの一連の活動に取り組み，制作に集中できるよう，活動の流れや材料・用具の管理の仕方を習慣化すること（自分とのかかわり）を中心に改善を行った。その結果，生徒は視聴覚機器を使用した説明に注目し，主体的に材料・用具の準備や制作に取り組む姿が見られるようになった（写真4-5）。

写真4-5　用具を準備する様子

2　生徒の変容

Ａさんは，活動の要点を写真やイラストで視覚的に示すなど，視覚的な手掛かりがあると，一人で活動に取り組むことができる生徒である。しかし，１学期に行った描画の学習では関心や積極性があまりみられず，９月の本題材の導入時には，よそ見をしたり，ぼんやりとしたりして，活動内容を理解して取り組むまでに時間が掛かる様子が見られた。そこで，常にＣＴや黒板が視界に入る座席配置（コの字を基本に，机を斜め前に向ける）にして，興味・関心が高い視聴覚機器（モニター画面）を用いて制作の手順や要点を説明した。さらに，彫刻刀などの用具を一式を一人ずつ用意し，用具の準備の手順や机上での配置，安全な彫刻刀の持ち方や手の位置などを視覚的に理解できるように留意しながら指導を行った。その結果，テレビ画面に注目して，説明を最後まで聞き，説明後は自分から用具を準備して，一人で集中して制作に取り組む姿が見られるようになった。また，自分で彫刻刀の持ち方や動かし方を工夫したり，版の向きを変えたりして試行錯誤する姿も見られ，下絵の線を，より正確に彫ることができるようになった（写真4-6）。

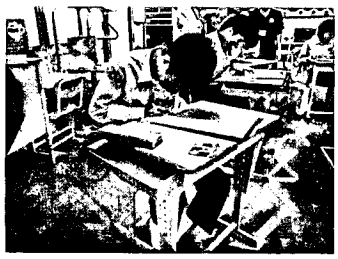


写真4-6　彫刻刀で彫るＡさん

Ⅳ　活用場面の様子

１学期の題材「友達や先生をかこう」では，美術の表現活動でよく使用する水彩絵の具の準備・片付け，混色の方法，彩色の方法の基礎の習得を図り，できるだけ一人で制作できるように指導を行った。本題材の「版画で表そう」は，題材設定に当たって，刃物の安全な扱い方を身に付けることで，他の教科等や生活において活用場面の広がりが期待されることや，１学期に学習した水彩絵の具の活用としての意義から，多色刷り木版画を扱うことにした。４月のＢさんは，教師の言葉掛けで絵の具の準備を行い，教師を呼び止めることも多かったが，本題材の刷りの活動においては，スムーズに準備を行い，混色の際のみ教師に確認をして，写真を参考にしながら一人で版に絵の具を塗って刷ることができた。また，１学期は絵の具に混ぜる水の量が多かったが，水の量が多すぎるとうまく刷ることができないことに気付き，教師の助言を受けながら水の量を調節できた。このように，１学期に習得した水彩絵の具の扱い方を，版画でも活用して，主体的に表現活動に取り組むことができた（写真4-7）。

写真4-7　版を刷るＢさん

Ⅴ　成果と課題，本実践に取り組んだ感想等

美術科での本実践では，制作の手順や材料・用具の適切な扱い方を理解し，見通しをもって，生徒一人一人が主体的に制作に取り組むことができる授業づくりを目標に取り組んだ。多様な教科等の授業研究会を通して，より多角的な視点から授業について語り合うことができ，美術科の教師のみの授業研究会では得られないであろうアイデアが授業改善に結び付いて生徒の変容として見られた。課題としては，題材設定の妥当性や美術科の視点で指導方法について話題になることが少なかったため，小学部からの指導の系統性を考慮した指導内容の精選や題材設定を行うとともに，学部や学校を越えて，図画工作・美術科の専門性を有する教師との研修や情報交換を行い，指導方法の改善に結び付けることが必要であると考える。

高等部　数学科

題材名「比例」

授業者：今　村　広　海
対　象：Dグループ男子４人　女子２人
実践期間：平成２４年４月～６月

Ⅰ　授業の立案

１　題材の全体目標

(1) 一方の量が２倍，３倍・・・になると，他方も２倍，３倍に・・・となるという関係に着目し，比例の性質を理解することができる。

(2) 比例の表やグラフを作り，求めたい数量を導くことができる。

２　指導計画（習得型と活用型の学習活動）

次	主な学習活動・内容	習得型・活用型	時数
一	１　伴って変わる二つの量と倍と割合の復習をする。 （オリエンテーションと既習事項の復習をする。）	【習得型】 比例を学ぶための基礎を思い出すことができるようにする。	2
二	２　比例とそのグラフについて知る。 （実験を通して比例の性質やグラフについて学ぶ。）	【習得型・活用型】 比例に関する基礎事項を理解できるようにする。	3
三	３　学習のまとめをする。 （比例の性質を使ってグラフによる課題解決をする。）	【習得型・活用型】 比例の表やグラフの性質を，身の回りの数量の関係について応用できるようにする。	2

Ⅱ　授業実施後の改善の経過（授業記録の一部を抜粋）

１　授業担当者で行った改善

目標，教えたいこと	生徒の様子	具体的改善策	改善後の様子
身の回りの数量を量ったり，文章を読み取ったりして，表に整理することができる。	Ａさんは，文章やイラストだけでは，問題の理解が難しく，隣の生徒を参考にして書き写すだけで終わってしまう。 （４月23日）	イラストに加え，具体物を準備した。実際に触ったり持ったりすることができるようにし，ものの長さや重さ，厚さ等を体感したり，測ったりできるようにした。 写真4-8 釘 （５月１日）	Ａさんは，自ら重さや長さを測り，それを表に記入し，発表することができるようになった。 （５月１日）

2　授業研究会(参加者)を通して行った改善

(東屋敷教諭：５／８実施　国語科授業研究会「丁寧な言葉を使って伝えよう」を参考にした。)

目標，教えたいこと	生徒の様子	具体的改善策	改善後の様子
比例の性質を利用して，求めたい数量を導くことができる。	Ｂさんは，ワークシートに早く記入することが目的となり，それが終わるとそわそわし，見直しをすることもなかった。Ｂさんにとって易しい問題であると思われる内容でも，間違いが見られることもあった。　（５月７日）	授業研究会で，個に応じたワークシートの工夫が必要ではないかと意見を受け，Ｂさんのワークシートの設問の難易度を少し高くした。じっくり問題を解くよう言葉掛けをしたり，「なぜ？」を問い，解答の理由を説明させたりした。（５月10日）	集中して課題に取り組み，分からない問題を教師に尋ねたり，ヒントを参考に考えたりする様子が見られるようになった。そして，比例を性質を利用して，求めたい数量を求められるようになった。（５月16日）

3　授業研究会(授業者)を通して行った改善

目標，教えたいこと	生徒の様子	具体的改善策	改善後の様子
生徒同士で話し合いながら，表やグラフを完成させたり数値を予想したりする。	Ｃさんは，話合い中に発言するものの，他の生徒の意見を聞くときには，集中していない様子が見られた。（５月10日）	記録役や進行役などの役割を与え，責任感をもたせたらいいのではという意見が出された。生徒の実態を考慮して，話合い活動時に役割を設定した。（５月15日）	進行として自分の意見を述べながら，他の生徒に意見を振る様子が見られた。また，記録係をすることで他の生徒の意見を最後まで聞くことができるようになった。（５月16日）

Ⅲ　授業と生徒の変容

1　授業の変容

４月，５月の授業では，毎時間の学習過程を，ワークシートによる前時の振り返り→本時の学習課題の把握→グループに分かれての課題解決の学習→ワークシートによるまとめと，各過程を明確にすることで授業への見通しがもちやすいようにした。授業に慣れてくると，自ら前時のワークシートを振り返るなどの様子が見られるようになってきた。

写真4-9　ワークシートに取り組む様子

しかしながら，授業の様子をＶＴＲで振り返ってみると，ワークシートによる導入やまとめの場面では，隣の生徒の解答を書き写すだけの生徒や，グループでの活動では，ほとんど発言できない生徒がいた。そこで，授業研究会で意見をもらい，改善策として①生徒の実態に合わせたワークシートの使用（教材・教具とのかかわり），②進行表や役割分担をした話合い活動（他の生徒や自分とのかかわり）③導入場面での「倍」の意味の再確認（教材とのかかわり）を設定した。その結果，主体的にワークシートを解いたり，生徒同士で教え合ったりする様子が多く見られるようになってきた。「倍」の意味をイラスト付きの問題で確認することで，倍の計算の意味を視覚的にも理解し，比例の問題にスムーズに取り組むことができるようになってきた。また，進行

表を使ったり役割を明確にしたりすることですべての生徒が発言できるようになった。

2　生徒の変容

Dさんは，入学当初，数学への苦手意識や自信のなさもあり，始めや終わりの挨拶以外で声に出して発表することはなかった。発表する場面では下を向いてうつ向き，教師と目を合わせないようにしているようにも見えた。また，グループ別での話合い活動中には一言も発言することができなかった。そこで，話合い活動時は記録係の役割を与え，進行表に従って，記録係として発言する機会を設けたり，グループの代表として発表する場面を設けた。すると，進行表に従って声に出して発言したり，グループの代表として表やグラフを描いたり，発表したりすることができるようになった。導入やまとめの場面でも，自分の解答に自信ある時はしっかり教師の方を見て，発表を促すと，声に出して自分の解答を発表できるようになった。保護者との連絡帳でも，「数学の話を家庭でするようになりました。」などの記入も見られた。夏休みの課題でも例題や1学期のワークシートを参考しながら積極的に取り組んだ様子が伺えた。

写真4-10　発表するDさんの様子

Ⅳ　活用場面の様子

本単元の最後の授業において，これまで学んできた比例の考えを使って，釘の重さから釘の本数を予想し，考える場面を設定した（段階的設定）。釘の本数から重さを求めることができるようになってきたEさんにとっては，少し難しい課題であると思われたが，既習事項や教師のヒント，さらに，グループでの話合い活動を参考に解決に向かってほしい課題であった。記録係として，グループ全員で測定したデータを積極的に表に書き込み，比例の関係であることを確認後，実際には測定していない数値も含め，それをグラフ化することができた。グラフの読み取りについては，縦軸の重さに注目するという教師のヒントを受けて，グラフから本数を導き出すことができた。実測したり，計算式に当てはめたりしなくても，グラフから傾向をつかみ，求めたい数値を導くことができた。

写真4-11　グループ活動の様子

Ⅴ　成果と課題，本実践に取り組んだ感想等

授業研究会を通して，他の授業での生徒の様子や有効な手だて等を確認したり，様々な角度からのアドバイスを受けたりと，授業改善のために効果的であった。課題としては，「比例」における活用場面の並行的設定を，どのように行うかである。学んだことを生活場面で使用できるように設定することで，学習したことの定着を図りたい。

数学は，抽象的な思考が苦手である知的障害のある生徒にとって，失敗経験を積み重ね，自信のもちにくい教科となっていることが少なくない。本実践を通して，数学の楽しさや良さを伝えることの難しさを改めて感じた。しかし，生徒が，今自分のもっている力でできた経験を積み重ねることが，数学への自信を回復し，生き生きとした表情で数学を学ぶことを可能にすることを実感できた。今後も，知的障害のある生徒にとっての数学の意義や価値を，実践を通して追究していきたい。

高等部　国語科

題材名「丁寧な言葉を使って伝えよう」

授業者：東　屋　敷　卓
対　象：Dグループ　男子４人　女子２人
実践期間：平成２４年４月～６月

Ⅰ　授業の立案

1　題材の全体目標

(1) 自分で状況に応じた敬語を考え，その使い方を理解することができる。

(2) 友達とのロールプレイを行い，振り返りを行うことで敬語を状況に応じて適切に使って話すことができる。

2　指導計画（習得型と活用型の学習活動）

次	主な学習活動・内容	習得型・活用型	時数
一	1　丁寧な言葉を知ろう (1) 丁寧語について知る。 (2) 尊敬語について知る。 (3) 謙譲語について知る。 (4) 敬語の意義について考える。	【習得型】 普段の生活の中でよく用いられる丁寧な言葉を考える。 自分が店員となった場合と客になった場合でのより相応しい言葉遣いを知ることができるようにする。	2
二	2　丁寧な言葉を使って伝えよう① (1) 丁寧な言葉を意識して，接客場面におけるふさわしい言葉遣いを考える。 (2) 丁寧な言葉遣いを用いて接客の練習（ロールプレイ）をする。	【習得型・活用型】 接客場面での丁寧な言葉遣いについて考える。 ロールプレイを通して接客の場に応じた丁寧な言葉を使うことができるようにする。	6
	3　丁寧な言葉を使って伝えよう② (1) 丁寧な言葉を意識して，面接におけるふさわしい言葉遣いを考える。 (2) 丁寧な言葉遣いを用いて面接の練習（ロールプレイ）をする。	【習得型・活用型】 面接場面での丁寧な言葉遣いについて考える。 ロールプレイを通して面接の場に応じた丁寧な言葉を使うことができるようにする。	

Ⅱ　授業実施後の具体的改善策（一部抜粋）

1　授業担当者で行った授業改善

目標，教えたいこと	生徒の様子	具体的改善策	改善後の様子
ロールプレイを行う時には，自分や友達の発表を見て，具体的な観点に沿って振り返ることができる。	友達の発表を見た感想が「良かったです。」，「いいです。」の感想が多く，理由を尋ねてもどこがよかったのかが明確になっていない。 （5月1日）	生徒自身がお互いを「言葉遣い」，「声量」，「視線」，「表情」の４項目で評価し合うことで観点を明確にできるようにした。 写真4-12 評価表 （5月8日）	「しっかり相手の目を見て話をしていました。」，「もう少し大きな声だと伝わりやすいと思います。」などの具体的な意見が多く聞かれるようになった。 （5月11日）

2　授業研究会（参観者）を通して行った改善

（今村教諭：５／10実施　数学科の授業研究会「比例」における話合いの工夫の意見を参考にした。）

目標，教えたいこと	生徒の様子	具体的改善策	改善後の様子
相手の意見も受け入れながら自分の意見も適切に伝えることができる。	特定の生徒の発言が多く，生徒の多くが話合いに参加できていない。（５月８日）	話合い活動では，少人数グループ（３人組）を編成し，役割を明確にして話合いを行うようにする。（５月11日）	一人一人が自分の役割を果たそうとする場面が多く見られるとともに全員が自分の意見を発表するようになった。（５月15日）

3　授業研究会（授業者）を通して行った改善

目標，教えたいこと	生徒の様子	具体的改善策	改善後の様子
場に応じた言葉遣いについて考えることができる。	敬語を使って話すことができる生徒がほとんどである一方，場に応じた使い方ができていないこともある。（４月23日）	生徒が今まで経験したことのあるような場を設定することで，イメージがしやすく，敬語の必要性をより感じられるようにする。（４月25日）	「それよりこの敬語の方がいいと思います。」等のより具体的な敬語の使い方やその意義を考えた発言が多く見られるようになった。（５月１日）
ワークシートを用いて丁寧語の必要性を考えることができる。	ワークシートを記入する際に隣の席の生徒のワークシートを写そうとすることが多く，自分から記入することは少ない。（５月１日）	授業研究会で，個に応じたワークシートの工夫があると良いのではないかという意見をもらった。（５月８日）	隣の席の生徒のワークシートを気にせずに自分からワークシートに記入することが多くなってきた。（５月11日）

Ⅲ　授業と生徒の変容

1　授業の変容

本グループは，敬語を使って話すことができる生徒がほとんどである一方，中には，場に応じた使い方ができていない生徒もいる。本題材では，生徒が今まで経験したことのあるような場を設定することで，イメージしやすく，敬語の必要性をより感じられるような取組を設定した。具体的には，自分の生活や現場実習で起こり得る可能性の高い場面を設定することで，生徒の日常生活に即した敬語やその意義を考えられるようにしたいと考え，授業を展開した。

ロールプレイの場面では，友達の発表を見た感想が「良かったです。」，「いいです。」の感想が多く，どこが良かったのかが分かりづらい現状もあった。そこで，映像も活用しながら，生徒同士がお互いを「言葉遣い」，「声量」，「視線」，「表情」の４項目で評価し合うことで観点を明確に評価できるようにした。そのような取組を行うことで，適切な他者評価ができるようになり，ポイントを押さえたアドバイスが見られるようになった。また，自分のことも同じ観点で振り返ることにより，自分の課題を適切に考えることができるようになった。（教材・教具とのかかわり，友達・自分とのかかわり）

話合い活動では，少人数グループ（３人組）を編成し，一人一人の役割を明確にして話合いを行うようにした。司会，記録，発表の役割を設定することで自分の役割を果たそうとする姿が見られた。また，繰り返し取り組むことで，話合い活動にも慣れ，全員が自分の意見を率直に伝える等の話合いの充実が見られるようになった。（友達とのかかわり）

2　生徒の変容

Ａさんは，日常生活において，時間，場所，理由など質問の内容に応じて適切に返答したり，新聞記事を読んでその内容をまとめたりするなど，これまでの授業で学んだことを生活の中で活用する姿が多く見られる。また，敬語についても「おはようございます。」，「ありがとうございました。」等の基本的な敬語や，「です。」，「ます。」などの丁寧語を使うことができる。しかし，その一方，場に応じた敬語の使い方ができていないことがある。丁寧に伝えることを意識し過ぎるするあまり，丁寧過ぎる言葉遣いになってしまうことがあり，産業現場等における実習の評価表でもそのことが指摘されている。そこでＡさんと評価表も活用しながら，自分の接客場面や面接場面を映像で振り返り，「言葉遣い」，「声量」，「視線」，「表情」の４項目で自己評価するようにした。始めは自分に対して厳しい評価も多かったが，良い点を適切に称賛してから課題点にも向き合うことで，徐々に良い点にも自分で目が向くようになり，次第に自分の課題を意識して取り組めるようになった。

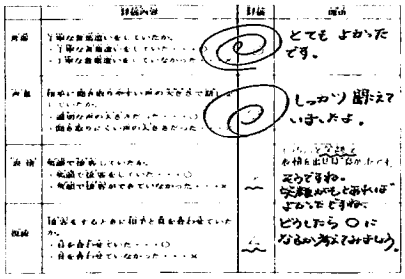


写真4-13　Ａさんの自己評価表

Ⅳ　活用場面の様子

本題材では，Ａさんの個人目標に「言葉遣いとともにその言葉を使う際の表情や気持ちも自分で考えて使うことができるようにする。」が挙げられている。そこで，国語科では，上述した言葉遣いを意識した取組，総合的な学習の時間での発表場面，自立活動で「ソーシャルスキルトレーニング」を活用した様々な場に応じた適切な言葉遣い，特別活動における学校行事での発表の場などを活用して取り組むこととした。

特別活動における学校行事では，Ａさんは児童生徒会長であるため，発表の場面も多い。年度当初は，敬語を用いた丁寧な言葉遣いはできていたものの，過度な緊張が見られ，発表を行う何日も前から練習を繰り返し行わなければ落ち着いて発表できない現状があった。そこで，国語科や自立活動での取組を各行事でも生かせるように取り組み，定型の文章を参考に繰り返すことで２学期の学校行事では，練習する時間が短くても適切な言葉遣いができるとともに落ち着いて取り組めるようになった。

写真４-14　学校行事での様子

Ⅴ　成果と課題，本実践に取り組んだ感想等

今回，国語科における取組とともに総合的な学習の時間，自立活動，特別活動，産業現場等における実習とも連携し，活用場面を意識した実践ができたのではないかと考える。また，自分の授業の授業研究会や参加者として参加した授業研究会を通して，生徒の他の授業での様子や他教科で有効な手立てを知ることで，国語科の授業においてもより有効な手立てを考えることができたのは，とても効果的であった。一方，今回の実践を家庭や関係機関と連携して取り組むことについては，不十分であった。今回の取組は，普段の生活の中での実践として取り組めることも多く，家庭や関係機関と連携して実践することでより大きな成果を得られると考えられる。今後は，より広い連携を深めた実践を行っていきたい。

高等部　総合的な学習の時間

題材名「現在の自分」

授 業 者：鶴田 智美　東屋敷 卓　飯母 有沙子
対　　象：高等部２年　男子５人　女子３人
実施期間：平 成 ２ ４ 年 ９ 月 ～ １ １ 月

Ⅰ　授業の立案

1　題材の全体目標

(1) 夢の実現に向けて今できることについて考えることができる。
(2) 自分が考えたことを表現することができる。

2　指導計画

次	主な学習活動・内容	習得型・活用型	時間
一	1　夢の実現に向けて今できることを考える。 (1) 教師の夢をテーマにして，今できることを導き出す方法について話し合う。 (2) 意見をまとめて今できることを提案する。	【習得型】 夢の実現のために，今できることを導き出すことができるようにする。	2
二	2　自分や友達の夢について考える。 (1) 自分の夢について振り返る。 (2) 自分の夢の実現に向けて今できることを考え，ワークシートにまとめる。 (3) 友達の夢の実現に向けて今できることを話し合う。	【活用型】 今できることを自分で考えたり友達と話し合ったりして，ワークシートを完成させる。	6
三	3　現場実習での目標を壮行会で発表する。 (1) 導き出した今できることの中から，現場実習の目標を具体的に設定する。 (2) パソコンで発表用のプレゼンテーションを作成する。 (3) 壮行会で発表する。	【習得型】 パソコンを使った発表の方法を学習できるようにする。	4
一人一人が導き出した今できることに対して，具体的に目標を設定して取り組む。			
四	4　実践報告会をする。 (1) 記録を基に，それぞれの実践を振り返り，まとめをする。(発表プレゼンや原稿を作成する。) (2)　発表する。 (3)　自分や友達の発表を振り返り，感想を伝える。	【活用型】 できるだけ一人で，パソコンを使って発表できるようにする。	4

Ⅱ　授業実施後の改善の経過（授業記録の一部抜粋）

1　授業担当者で行った改善

目標，教えたいこと	生徒の様子	具体的改善策	改善後の様子
自分の好きな活動や取り組みたい活動を選択することができる。 （Ａさん，Ｂさん）	教師がイラストカードを近くに持っていかなければ選択する姿があまり見られない。 （９月27日）	関心の高いパソコン画面でイラストを表示した。また，手を伸ばして画面に触れて選択できるように座席位置を変更した。 （10月10日）	自分から画面上のイラストに触れて，好きなものを選択することができた。 （10月10日）

2　授業研究会（参観者）を通して行った改善

（佐藤教諭：７／19実施　グループ作業授業研究会で出された，行動の理由に関する意見交換を参考にした。）

目標，教えたいこと	生徒の様子	具体的改善策	改善後の様子
友達の夢の実現に向けて話し合う場面で，友達の立場で意見を述べることができる。 （Ｃさん）	「僕だったら○○する。」と自分の立場で意見を伝えることが多い。 （９月27日）	グループ作業では，行動の理由を考える場面が設定されていたことを受けて，自分の意見の理由を考えられるような発問を行うようにした。 （10月10日）	「○○さんはこれが得意だから。」と，相手の立場で発言することが多く見られるようになった。 （10月16日）

3　授業研究会（授業者）を通して行った改善

目標，教えたいこと	生徒の様子	具体的改善策	改善後の様子
イラストから自分の意見を選択してワークシートを完成させることができる。（Dさん，Eさん）	Dさん，Eさんが自分で選んだり発言したりする姿があまり見られない。（9月27日）	授業研究会で，選択する機会をもっと増やしてはどうかという意見をもらい，グループを分けて少人数にし，選択して発言する機会を多く設定した。（10月10日）	Dさん，Eさんが自分から多く発言する姿が見られ，ワークシートを完成させることができた。（10月16日）

Ⅲ　授業と生徒の変容

1　授業の変容

夢の実現に向けて今できることを考えやすくするために，段階的に思考を深めることができるようなワークシートを使用しながら取り組んだ（写真4-15）。学習を積み重ねていく中で，「こんなことができるかも。」と自分の意見を言ったり，「こっちができる。」とイラストを選択しながら決めたりする姿が多く見られるようになった。このように，生徒が思考したり活発に意見を交換したりする姿が見られるようになった理由の一つとして，友達のワークシートを基にして全員で考える場面で，自分の出した意見が反映されているということを分かりやすくするために，出した意見に自分の名前も書く（自分・友達とのかかわり）ように改善したことが挙げられる。この改善から，自分の意見が人の役に立っていることを実感しやすくなり，その喜びが友達のことを真剣に考えようとする意欲につながったと考えられる。現場実習に向けた壮行会では，自分の夢とその実現に向けて実習先で頑張ることをパソコンを使って発表したが，一人ではなく友達と協力して考えたということもあり，自信をもって堂々と発表する姿が見られた。

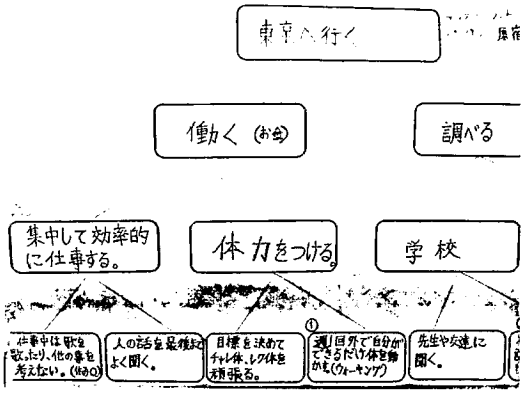


写真4-15 使用したワークシート

2　生徒の変容

Cさんは，上記（写真4-15）のようなワークシートを使用することで，自分の夢である「飲食店で働くこと」を実現するために，「体力を付けること」，「時間を守って作業すること」など，今できることをほとんど一人で導き出すことができた。そこで，友達の夢の実現のために今できることを一緒に考える場面を設定し，友達の立場に立って提案するように伝えたが，「僕はこうします。」と自分の立場で発言する姿が見られた。その背景として，相手の立場に立つことの意味が十分に理解できていないことが推測されたため，相手の得意なこと，苦手なことを踏まえて考えるように伝えたところ，「○○さんはこんなことが得意だから，こうしてはどうですか。」と，相手の立場で提案する姿が見られるようになった。

Fさんの夢は，好きなお笑いの芸人の「○○○に会いたい。」であり，今できることについて，提示されたイラストの中から選んだり，友達から意見をもらったりして検討した。Fさんは，これまでに教師や友達の夢をテーマに取り組んだことを生かして，自分からイラストカードを選択し，「○○をする。」と言いながらイラストを貼り付けたり，友達からの提案に対して，「やってみたい。」と言ったりして積極的に取り組む姿が見られた。夢の実現に向けて，働いて給料をもらわなければならないとの意見から，①作業学習や現場実習を頑張ること，②家庭での役割（食器の後片付け）をして小遣いを貯めることの二つの目標を設定することができた。

表4-1　Ｃさんの目標達成の推移

個人目標	自分や友達の夢に対して，今できることを考えて，ワークシートにまとめたり，発表したりすることができる。	
	評価	授業の様子
９月21日	○	自分のことについては発言するが友達のことを考えた発言はない。
10月９日	◎	グループを８人から３人に変更した。自分から進行役になって，友達に問い掛ける姿が見られた。
10月16日	◎	ワークシートを使用して，夢の実現に向けた今できることを一人でまとめることができた。

◎十分に達成できた　○ほぼ達成できた　△達成できなかった

Ⅳ　活用場面の様子

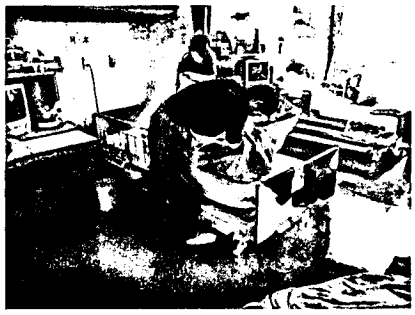


写真4-16　実習先でのＣさんの様子

Ｃさんは，事業所で現場実習を行ったが，自分の夢である飲食店で働きたいことについて自分から話をしたり，夢の実現に向かってどうすれば良いかを尋ねたりするなど，自分の夢に向かって頑張ろうとする姿が見られた，と実習先から報告を受けた。これまでに行った２回分の現場実習の評価と比較すると，「汚れたところに自分で気付き，雑巾で拭いていた。」等，作業に対する積極性において変化が確認された。また，夢の実現に向けた経過報告を学級で行った際に，家庭で料理を作ったことを発表し，「母親が喜んでくれたので，また作ってみたい。」と，家族が喜んでくれたことがＣさんの達成感になり，夢を実現させようとする前向きな姿勢を感じることができた。

また，Ｆさんのお笑い芸人に会うという夢を段階的に実現できるようにするために，本人と担任が話し合い，前項で述べた①，②に対しては，お笑い芸人のＤＶＤを友達と一緒に見ることを目指して取り組むことにした。具体的には，10月下旬から11月上旬までの期間において，①の実習先の福祉施設で作業に最後まで取り組むことができたら支援員からシールをもらえるようにした。そして，一定量たまったシールは，ＤＶＤ試写会のチケットに交換できるようにした。②の家庭で行う食器の後片付けについても，実行できたら保護者からシールをもらうという同様の方法で行った。その結果，実習先の支援員から，シールが増えることに喜んでおり，自分から作業に取り組むことができたと，報告を受けた。家庭からは，母親が言わなくても自分から食器を片付ける等，意欲的に取り組んでいると連絡があった。

写真4-17家庭でのＦさんの様子

Ⅴ　成果と課題，本実践に取り組んだ感想等

今回，夢を実現するために今できることを，ワークシートを用いて段階的に考える取組を行ったが，友達と協力しながら一人一人が「今できること」を導き出すことができた。また，他の教科を担当している教師と一人一人の生徒の夢について共通理解を図り，各教科等の目標と夢を関連させて授業を行った結果，これまで以上に学習意欲が高まり，積極的に学習に参加しているとの報告があった。このことから，総合的な学習の時間で夢を取り扱う題材を設定することの大切さや，一人一人の生徒の夢の実現に向けて教師間で共有・連携しながら取り組むことの重要性を感じた。

課題として，生徒の実態差が大きいため，ワークシート等の個別の指導及び支援を更に充実させる必要がある。一人一人に応じた手立てやグループ編成などについても検討していきたい。また，学校全体としての総合的な学習の時間の指導計画の改善も行っていきたい。

高等部　作業学習

単元名「ふようまつりに向けて製品を作ろう」

授 業 者：宮内 文久　川添 直人　渡邉 千鶴　飯母 有沙子
対　　象：木 工 班　　男子５人　　女子３人
実践期間：平 成 ２ ４ 年 ９ 月 ～ １ ２ 月

Ⅰ　授業の立案

1　単元の全体目標

(1) 時間一杯集中して製作することができる。
(2) 良品製作に必要なコミュニケーションを行う等，友達と協力して作業に取り組むことができる。
(3) 用具の効率的で安全な扱い方や，良品を作る技能を身に付けることができる。
(4) 良品を作る必要性や良品作りのポイント，自分の課題を踏まえた具体的な目標設定や反省の仕方などを知り，作業に生かすことができる。

2　指導計画（習得型と活用型の学習活動）

次	主な学習活動・内容	習得型・活用型	時数
一	1　ふようまつりについて知る。 （オリエンテーション）	【習得型】 ふようまつりの期日や流れなどを知り，具体的な目標設定と自己評価ができるようにする。	3
二	2　基本製作をする。 （分担や手順の理解，技能を高める。）	【習得型】 木工に関する技能や，報告等の作業態度を身に付けることができるようにする。	20
三	3　応用製作をする。 （良品を効率よく製作する。）	【活用型】 習得した技能や報告等の作業態度を応用製作に活用できるようにする。	32
四	4　学習のまとめをする。 （販売準備，反省をする。）	【習得・活用型】 製品の包装や金銭の取扱い，接客などを身に付け，自分たちで運営できるようにする。	10

Ⅱ　授業実施後の改善の経過（授業記録の一部を抜粋）

1　授業担当者で行った改善

目標，教えたいこと	生徒の様子	具体的改善策	改善後の様子
自分の目標が詳しく分かり，作業に取り組むことができる。	Ａさんは，自分がすることが分からずに，自主的な行動が見られず，友達や教師の言葉掛けに頼っている様子が見られる。 （９月６日）	ホワイトボードを用いて，個人目標を各自が確認できるようにした。文字や写真が見える場所に掲示した。 （９月10日）	Ａさんが，必要な道具を自分で判断して用意し，「角を丸くできました。」等，目標を理解して作業に取り組む姿が見られた。　（９月24日）

2　授業研究会（参観者）を通して行った改善

（四元教諭：10／24実施　美術科授業研究会「版画で表そう」の環境設定の意見を参考にした。）

目標，教えたいこと	生徒の様子	具体的改善策	改善後の様子
用具を一人で準備して，安全に使用することができる。	展開時にＢさんは，準備の取り掛かりに時間が掛かり過ぎている。 （10月24日）	美術科の授業研究会で，道具の配置の工夫が共有されたことを受け，本授業でも用具配置場所の整理・変更，写真と文字の掲示を追加した。 （11月９日）	Ｂさんは，自分で見て道具を取りに行く場所が分かり，準備とその後の作業に取り掛かる時間が速くなった。 （11月12日）

3　授業研究会（授業者）を通して行った改善

目標，教えたいこと	生徒の様子	具体的改善策	改善後の様子
時間一杯作業に集中することができる。	Ｃさんは，研摩の仕上がりの状態を，教師に尋ねて確認することが多く，作業に集中できず作業量が少なくなっている。 （10月30日）	自分で触って分かる支援ツールの再活用。また，報告はせず，箱に入れて次の研磨作業に移るようにした。 （11月９日）	Ｃさんは，研摩が終わった後に呼び掛ける回数が減り，自分から，作業を次々に進めることができるようになってきた。 （11月12日）

Ⅲ　授業と生徒の変容

1　授業の変容

写真4-18 目標を確認するＡさんたち

生徒は，精一杯作業に取り組んでいたが，自分がしたことや，できたことを伝えることが難しい様子が見られた。そこで，移動式のホワイトボードを使用して，自分の目標が分かるように個別に目標を確認し，作業中も確認できるように，作業している場所の近くに掲示するようにした（写真4-18）。すると，自分がしていることがより詳しく分かったり，作業中に「つるつるになりました。」と報告したり，振り返りのときに，「２個磨きました。」等発表したりして，自分から，作業内容やできたことなどを，より詳しく伝えられるようになってきた。

しかし，作業の様子をＶＴＲで振り返ってみると，用具の準備に時間を費やし，活動時間が短くなっていたり，他の学習場面のように，学習に集中することができていなかったりする生徒がいた。そこで，授業研究会での意見や，授業担当者間でその原因を考えていく中で，改善策として，①用具の配置と掲示の仕方の工夫（教材・教具とのかかわり），②活動量の増加（教材・教具とのかかわり，自分とのかかわり）が挙げられた。この２点を中心に改善を進めた。

すると，11月には，作業用具を自ら取り出し，準備に掛かる時間を短くできるようになり，より長時間，集中して作業に取り組む姿が多く見られるようになった。

2　児童生徒の変容

Bさんは，作業を始めると，目標に向かって，時間一杯作業を進めることができていた。一方で，どの用具が必要で，その用具がどこにあるのかが分からない等，準備や片付けに多く時間が掛かっている姿が見られた。そこで，用具を配置する場所の整理，写真と文字の掲示追加を行うと，自分で道具がある場所が分かりやすくなり，使う道具を自分から取りに行ってそろえる姿や，準備や片付けの時間が短くなったことで，作業に取り組む時間が増えていった。

写真4-19　作業に集中するCさん

Cさんは，製品の出来栄えを教師と確認するなどの関わりが非常に好きで，また，称賛されることで更に意欲を高めて作業に取り組んでいた。一方，確認が多くなり過ぎるあまり，作業量が少なくなり，製品の出来高が目標に達しないところがあった。そこで，一人で作業を進められるよう，材料と製品を分けたところ，時間一杯，休み時間も作業を続けるほど，集中して作業を進めるようになった（写真4-19）。

Ⅳ　活用場面の様子

Aさんは，作業学習では「より具体的な目標設定と評価」を，数学科では「図形の名称とその意味を知る」を並行して行った。数学科で，直線や角，円などの名称とその意味を知ることで（写真4-20），数学科で学習した言語を自発的に用いて，「5個，角を丸くします。」と，自分が分かる言葉で目標を以前より詳しく設定したり，「まだ角が丸くなっていません。」と，一人で製品の品質を判断，点検，評価などを行う姿が見られるようになった。

写真4-20　数学の学習場面

このように，複数の教科等の学習内容を関連付けることで，作業学習で数学科の学習を活用するAさんの姿が見られるようになった。

Ⅴ　成果と課題，本実践に取り組んだ感想等

本実践によって，他の教科等における様子や有効な手だてなどの情報を多角的な視点で捉え，共有できたことから，より多くの改善のアイディアやヒントを得て，それを授業に反映し，生徒が豊かに学ぶ姿が増えてきた。また，教科間の関連を図り，学習の成果を様々な場面で発揮したり，活用したりする生徒の姿が見られるようになったことも挙げられる。

これまで，個人及び授業担当者間までの授業改善と比較して，より授業改善を速めることができた。今後，生徒が豊かに学ぶ姿が更に増えていくよう，本実践を継続していきたい。

高等部　音楽科

題材名「いろいろな楽器を演奏しよう～リズム創作～」

授 業 者：渡邉 千鶴　宮内 文久　飯母 有沙子
対　　象：のびのびグループ　男子９人　女子３人
実践期間：平 成 ２ ４ 年 ９ 月 ～ １ ０ 月

Ⅰ　授業の立案

１　題材の全体目標

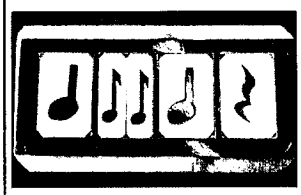
(1) 音符の長さの違いを知り，拍を意識して演奏することができる。
(2) 友達と一緒にリズムを組み合わせたり，合奏したりすることができる。

２　指導計画（習得型と活用型の学習活動）

次	主な学習活動・内容	習得型・活用型	時数
一	１　四分音符と八分音符について知る。 (1) 音の長さの違いに気付く。 (2) 四分音符と八分音符の特徴を知る。	【習得型】 音を体感しながら，音符と結び付けて理解することができるようにする。	2
二	２　リズムを創作する。 (1) 小節について知る。 →今回は４分の４拍子１小節とする。 (2) 友達と一緒にリズムを作る。	【習得型】 教材・教具を使用して，拍の決まりを理解することができるようにする。 【活用型】 習得した知識・理解をリズム創作に活用できるようにする。	6
三	３　打楽器を使用して演奏する。 (1) グループで演奏する。 (2) 全員で演奏する。	【習得型・活用型】 創作したリズムを楽器で表現できるようにする。	2

Ⅱ　授業実施後の改善の経過（授業記録の一部を抜粋）

１　授業担当者で行った改善

目標，教えたいこと	生徒の様子	具体的改善策	改善後の様子
四分音符と八分音符を組み合わせて，１小節のリズムを作ることができる。 （本時におけるＡさんの個人目標）	Ａさんは，四分音符と八分音符の違いを聴き分けられるが，小節の規則は，曖昧な様子が見られた。 （１小節にいくつ入るか習得していない。） （９月14日）	小節パネルと音符パネルを作成し，四分音符，八分音符がいくつ入るか視覚的に理解することができるようにする。  写真4-21　音符パネル （９月21日）	Ａさんは，音符パネルを並べて，「八分音符は小さいから，一つの部屋に二つ入るね。」とつぶやいていた。 （９月21日）

2　授業研究会（参観者）を通して行った改善

（鶴田教諭：10／11実施　総合的な学習の時間の授業研究会におけるＢさんに対する環境の設定，教材・教具に関する手立てや授業研究で出された意見を参考にした。）

目標，教えたいこと	生徒の様子	具体的改善策	改善後の様子
テーマに沿って，自分の考えを言ったり，選択したりして自分の意見を伝えることができる。	Ｂさんは，四分音符と八分音符の違いを習得しておらず，発問の内容を理解することが難しい。	Ｂさんが映像を積極的に見ながら学んでいる姿を受けて，映像を使用して，発問内容への理解を高めることにした。その際，パソコンを操作する活動を設定した。	パソコン操作には応じなかったが，終始，映像を見ている姿が見られた。
	感じたことを言葉で伝えることが難しい。（10月１日）	Ｂさんが選択しながら話合い活動に取り組んでいる姿を受けて，選択肢を設定した。（10月16日）	パネルを操作して，リズムを創作する姿が見られた。（10月16日）

3　授業研究会（授業者）を通して行った改善

目標，教えたいこと	生徒の様子	具体的改善策	改善後の様子
四分音符と八分音符の長さの違いに着目して，リズムを創作することができる。	Ｂさんは，パネルを使用して，リズムを複数創作しているが，友達が気付いていない。（10月11日）	Ｂさんの意見を聞いて，友達に分かりやすく伝えるＣさんの姿を見て，友達に伝えることができるＤさんを同じグループにした。（10月16日）	打楽器を演奏して友達にリズムを伝え，そのリズムをＤさんが楽譜にしていた。（10月16日）

Ⅲ　授業と生徒の変容

1　授業の変容

のびのびグループの生徒は，大きな音が苦手であったり，創造的な表現が難しかったりする生徒が多い。そのため，楽器の選定や創作方法を工夫しながら，授業を展開した（写真4－22）。

本題材の指導計画では，音符や小節について習得し，その知識を活用して，リズムを創作していく流れを想定していたが，等質でグループ編成をしているため，理解度に差が生じ，音符や小節の特性を理解することが難しく，創作活動に参加することが困難な生徒がいた。そこで，授業担当者間で話し合い，リズム創作をするグループ活動の際，手掛かりとなるリズム，音符パネルを作成することにした（教材・教具とのかかわり）。その際，音符パネルの大きさを工夫することで，音の長さを体感することができるようにした（写真4－23）。同時に，これまで授業研究会で参観した話合い活動の様子を参考にし，創作活動時のグループ編成を多様な関わりがもてるように工夫した（友達とのかかわり）。これらを中心に改善を進めていった結果，音符や小節の知識を用いて理論的にリズムを創作したり，パネルを操作して創作活動に参加したりする姿が見られるようになり，友達同士で意見を交わしながら一つのリズムを創作することにつながった。

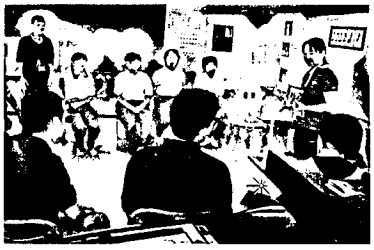


写真4-22　授業の様子

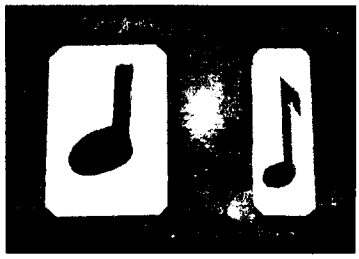


写真4-23　音符パネル

2　生徒の変容

Ｂさんは，音楽を聴くことが好きである。しかし，感じたことを言語で表現したり，友達と一緒に活動したりすることが難しく，様々な授業における話合い活動では，ただその場にいることが多かった。当初，そのようなＢさんの姿から，「話合い活動は難しい。」と考えていたが，授業研究会を通して，Ｂさんが教材・教具を使用して積極的に取り組む姿を見て，音楽の授業でも創作における話し合い活動を充実させたいと考えた。

まず，音符パネルを改良し音符をくり抜くことにとした（写真4-24)。こうすることで，友達が作ったリズムにＢさんが音符パネルをはめ込む活動を設定することができ，Ｂさんが話合い活動に参加できるようになった（友達とのかかわり)，(教材・教具とのかかわり)。また，Ｂさんはこの活動を繰り返し行うことで，創作活動の見通しがもてるようになり，自ら音符パネルを使用して，創作する姿が見られるようになってきた（写真4-25)。また，Ｂさんが作ったリズムを教師が即時に打楽器で再現することで，自分の作ったリズムを味わうことができるようにした（自分とのかかわり)。そして，本題材終了時には，Ｂさんが打楽器を演奏しながら友達に伝える姿が見られるようになってきた（友達とのかかわり)。

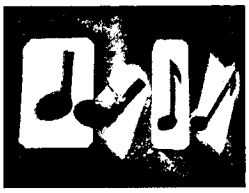


写真4-24　改良したパネル

写真4-25　創作活動時のＢさん

Ⅳ　活用場面の様子

Ｂさんの個別の指導計画の年間を通じて身に付けさせたいこととして，「学習方法や課題などについて，自分で選択し，活動に取り組むこと」が挙げられていた。そこで，ねらいを踏まえた上で，音楽科では「パネルもしくは楽器を選択してリズムを創作し，演奏する学習活動」を，国語科では「自分の作った文を選択して，発表する学習活動」を設定することにした。

写真4-26　ワークシートに取り組むＢさん

国語科におけるＢさんは，絵や写真を見て，「誰が」，「何を」，「どうする」というカテゴリーに沿って，文を書くことができる。そこで，主語が複数存在する絵や写真を教材として使用し，複数の文を考えることができるようにした（写真4-26，27)。こうすることで，発表の際，Ｂさんが一番伝えたいことを選択する姿につながった。発表では，無造作に選んでいる印象を受けたが，授業後，ＶＴＲを見ると，一通り文を見てから，選んでいる姿が確認された。現在，Ｂさんは，自ら積極的に発表するまでには至っていないが，教師の発問に対して，文を選択して発表する姿が多く見られるようになっている。

写真4-27　ワークシート

Ⅴ　成果と課題，本実践に取り組んだ感想等

音楽科の授業は，実態差が幅広い12人の集団を一斉に指導していく難しさがある。授業者自身，毎時間，工夫しながら取り組んでいたつもりだったが，実際に授業研究会を通して自分の姿をＶＴＲで確認してみると，言語を中心に授業を展開していたこと，生徒の伝えようとする姿に気付いていなかったことに改めて気付かされた。また，これまでの授業研究会を通して，一人一人の表現力について知り，授業につなげることができたことや特に表現することが難しい生徒に対して，試行錯誤しながら，実践できたことは，大きな成果であった。

音楽科は，感じたことを言葉を介することなく自由に表現することができる教科である。生徒の自由な発想を大切にしながら，集団のよさを生かした授業づくりに今後も取り組みたいと考える。

高等部　作業学習

単元名「リサイクルメモ帳を作ろう」

授 業 者：小久保 博幸　東屋敷 卓　鶴田 智美
対　　象：A グ ル ー プ　男 子 6 人
実践期間：平 成 2 4 年 5 月 ～ 1 2 月

Ⅰ　授業の立案

1　単元の全体目標

(1) 道具の安全な使い方や手順に気を付けながら，時間いっぱい作業に取り組むことができる。
(2) 自分の担当する工程を理解し，良品を意識しながら作業に取り組むことができる。

2　指導計画（習得型と活用型の学習活動）

次	主な学習活動・内容		習得型・活用型	時数
一	1　作業内容や分担された作業内容を知る。 (1) 製品と工程，材料や道具の使い方について知る。 (2) 作業分担を決めたり製作工程の手順を確認したりする。	練習期間	【習得型】 製品作りに対する見通しをもつことができるようにする。	2
二	2 手順を覚え，作業に慣れる。 (1) 製作手順を覚えたり製作に必要な道具や材料を自分で準備したりする。 (2) 製作の各工程が正確にできるようにする。	校長室・事務室などへの用紙補充	【習得型・活用型】 担当する工程に必要な道具等の準備を自分で行うことができるようにする。	6
三	3　丁寧に作業をする。 (1) 製品の良否を自分で判断したり，うまくいかない原因を考えたりする。 (2) 出来高や良品を作るためのポイント等の目標を立てて製作する。		【習得型・活用型】 製作過程で，良品作りのための自己判断，自己決定をすることができるようにする。	16
四	4　意見や感想を踏まえて作業をする。 (1) 受注先からの意見や感想を踏まえて，製品を改良する。 (2) 生徒の興味関心に応じて，担当は入れ替わる。		【活用型】 他の生徒の工程を担当したり，使いやすい製品を作ったりできるようにする。	10

Ⅱ　授業実施後の改善の経過（授業記録の一部を抜粋）

1　授業担当者で行った改善

目標，教えたいこと	生徒の様子	具体的改善策	改善後の様子
手を汚さずに，決まった位置にスタンプを押すことができる。	スタンプを手に持って用紙に押そうとすると，手がインクで汚れたり，押す位置がずれたりしてしまう。 （5月30日）	スタンプを手に持たずに押したり，押す位置が一定になったりするような支援ツールを開発する。 （5月30日）	力を少し加えるだけで，決まった位置にスタンプを押すことができるようになった。 （9月14日）

2　授業研究会（参観者）を通して行った改善

（東屋敷教諭：5／8実施　国語科授業研究会「丁寧な言葉を使って伝えよう」を参考にした。）

目標，教えたいこと	生徒の様子	具体的改善策	改善後の様子
丁寧に用紙を取り扱ったり，自分の担当している工程の位置付けを理解したりすることができる。	工程の内容は覚えたが，製品がばらばらになったり，全工程の中での自分の位置付けが理解できていない様子が伺えたりする。 （5月8日）	環境の整備が検討されたことを受け，用紙に応じたかごや作業の流れが分かるカードを用意し，導入時に確認できるようにする。 （5月8日）	整然と製品を重ねることができるようになった。また，カードを使用することで，工程を理解して作業する姿が見られた。 （9月14日）

3　授業研究会（授業者）を通して行った改善

目標，教えたいこと	生徒の様子	具体的改善策	改善後の様子
全作業工程を通して，人と関わりながら作業をすることができる。	自分の分担された工程を行うことはできるが，他の生徒との関わりがあまりなく，教師の指示を待って動いている。（6月21日）	工程間の製品の流れが滞っているとの意見を受け，材料が無くなったら，前の工程の所にもらいに行くことのできるような動線の工夫をする。（6月21日）	カードを見たり，教師からの言葉掛けを受けたりしながら，自分から材料を取りに行く姿が見られるようになった。（9月14日）

Ⅲ　授業と生徒の変容

1　授業の変容

本グループの生徒にとって，リサイクルメモ帳作りは初めての経験であった。そこで，まず，分担内容を自覚したり，確認したりすることができるように，導入や場の設定の工夫を行った。導入では，工程ごとに絵カードを用意して，作業の流れの順に説明を加えながら教師が掲示し，担当生徒と教師の写真を工程に応じて貼るようにした。顔写真を貼る際は，生徒が自分で行うようにしたことで意欲的に学習に参加するようになり，自分の工程だけでなく，友達の工程についても発言する生徒が見られるようになった（教材・教具とのかかわり）。場の設定の工夫としては，工程の流れに沿って座席を配置し（写真4-28），自分の工程の位置付けや作業の流れを理解しやすいようにした。工程間の生徒同士の関わりもスムーズになり，「(自分の）材料が無くなったらもらいに行く。」というルールが理解しやすくなった（友達とのかかわり）。ロッカーに道具の写真を貼ったことで，自分の道具の場所が明確になり，準備や片付けを主体的に行うこともできるようになった。また，自分の作業について振り返ることができるように，作業日誌を記入するようにした。項目として作業内容の選択，自己評価欄，他者評価（教師）欄を設け，終末時に発表することを習慣化するようにした（写真4-29)。「その日のがんばりを発表したい。」という想いから，積極的に手を挙げ，誇らしげに発表する様子が多く見られるようになった。また，導入時に作業日誌を用いて前回の作業の様子について振り返るようにしたところ，目標設定が行いやすくなった（自分とのかかわり)。

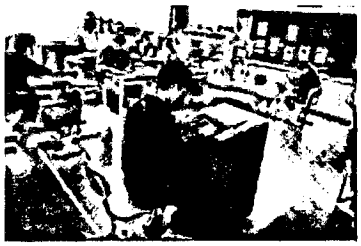


写真4-28　場の設定の工夫

写真4-29　作業の振り返り

2　生徒の変容

スタンプ押しの担当であるＡさんとＢさんは，当初，手にインクが付いてしまったり，スタンプを押す場所が一定でなかったりした。そこで，担当者による授業ミーティングにより，補充式のスタンプを用いたり，用紙を決まった場所に置くだけで押す場所が固定化される支援ツール（写真4-30, 31）を製作したりした。押す場所が明確になったり，手にインクが付くこと無く，簡単な動作で押したりすることができるようになった。Ｃさんは，用紙の表裏を確認して，リサイクル

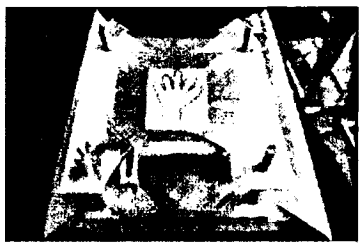


写真4-30　スタンプ押しツール1

の可否を判断する担当である。判断する際，「○ですか，×ですか。」と教師に問う場面が多くあり，当初はすぐに良否を教師が伝えていた。判断力の向上があまり見られなかったので，聞かれた場合に即答せず，「どちらだと思いますか。」と問い返すようにした。すると，初めの頃は戸惑う様子もあったが，一人で思考する姿が徐々に見られるようになり，正しく判断することができるようになった。他の生徒に対しても，修正が必要な場合に改善点をすぐ教えるのではなく，自分で考えることができるような言葉掛けをし，しばらく待つことで，思考しながら取り組む姿が見られるようになった。Dさんは，スライド式裁断機を用いて紙の裁断を行っている。紙がそろうようにガイドを付けたものの，不揃いになってしまっていた。そこで，紙の枚数を数えること，そろえてからガイドに沿って紙を挿入し，裁断することを意識付けることができるよう，カードを用意し，必要に応じて指し示すようにした（写真4-32）。声に出して枚数を数えたり，そろえたりする姿が見られるようになり，紙の大きさもそろうようになってきた。

写真4-31　スタンプ押しツール2

写真4-32 支援カード

Ⅳ　活用場面の様子

リサイクルメモ帳の土台は，班別作業の木工班に依頼した。木工班には，Aさん，Dさんが在籍しており，グループ作業と班別作業との関連性をもたせるようにした（写真4-33）。メモ帳作りの際，木工班で製作したメモ台を見せると，更に意欲的に取り組む様子が見られた。また，本グループメンバーは全員数学Aグループ（数学的内容に対する興味・関心を高めることを第一の目的としたグループ）に属しており，数学への興味・関心や学習への意欲を高めるために，曲に合わせて10までの数を数唱する学習を継続している。Eさんが用紙を5枚ずつ数える際，その曲を口ずさみながら確実に数える姿も見られた。

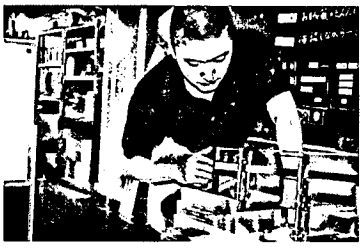


写真4-33 木工班でのDさん

Ⅴ　成果と課題，本実践に取り組んだ感想等

授業担当者による授業ミーティングや授業研究会では，主体的に活動する生徒たちの姿を目指して，毎回，いろいろなアイデアが出され，分担された仕事に責任をもって最後までやり遂げたり，集中して根気強く正確に作業したりする生徒の姿が多く見られるようになってきた。単元開始当初は試行錯誤の日々であったが，分担された工程を自分の力で遂行することの喜び，満足感，達成感を表現する生徒たちの姿に触れ，授業づくりの楽しさを実感している。

本実践は，今後，作業意欲をもち続ける工夫や担当する工程の入れ替え，協力して作業をする場面の設定などを行いながら今後も継続していきたい。